

鹿大ジャーナル

KADAI JOURNAL

<http://www.kagoshima-u.ac.jp/>

特集

「進取の精神」を育む 鹿児島大学の取り組み

鹿大「知」の探検

世界の先頭を走るフサカサゴ科の分類学者

総合研究博物館 本村浩之教授

鹿大の新たな試み 「獣医師キャリア形成概論」開講

アラムナイ追跡隊 名古屋港水族館長 祖一誠さん

輝く鹿大生 下山翔平さん(教育学部学校教育教員養成課程1年)

鹿大見てある紀 焼酎学講座研究棟「北辰蔵」

鹿大への提言 出水市長 渋谷俊彦氏

なんでも情報版「みみずく」 男女共同参画シンポジウムを開催 ほか

かごしま探訪 「薩摩おごじよの知恵」法文学部原口泉教授

一念のけしき

「進取の精神」を育む 鹿児島大学の取り組み

「進取の気風あふれる
総合大学」をめざして

鹿児島大学では、第2期中期目標・中期計画の教育目標において「進取の精神を有し、学士力を備えた人材を育成する」教育を柱としている。この「進取の精神」という言葉のほか、平成19年制定の鹿児島大学憲章においては「進取の気風」という言葉も使われている。これらは今後の鹿大がめざすべき大学像を表現するキーワードであるといえる。

現在、鹿大では学士課程の基盤となる共通教育改革をはじめ、専門教育の質を保証するシステムの整備、学生による学生憲章の策定や全学的・系統的カリキュラムの整備・拡充、アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの見直しなどを進めつつある。「進取の精神」を育む教育を確立し、名実ともに「進取の気風あふれる総合大学」となることをめざしている。

今回の特集では「進取の精神」を育み、進取の気風あふれる総合大学をめざすための取り組みの一端を紹介する。

鹿児島大学がめざす 「進取の精神」とは

鹿大のめざす未来像を
表現する言葉

歴史に見る
「進取の精神」の源流

「進取の精神」は、鹿大の第2期中期目標・中期計画の柱として、中期目標の前文に謳われている。「鹿児島大学は、『鹿児島大学憲章』に基づき、我が国の変革と近代化の過程で活躍した先人の意志を受け継ぎ、自ら困難な課題に果敢に挑戦する『進取の精神』を有する人材を育成し、地域とともに社会の発展に貢献する知の拠点として、『進取の気風にあふれる総合大学』をめざす(第2期中期目標前文)。また、平成19年制定の鹿児島大学憲章や鹿児島大学の基本的目標にも「進取の気風」という言葉が盛り込まれている(下図)。

これらの言葉には、鹿大の根ざす鹿児島という土地の歴史的背景がある。鹿大の起源は、島津重豪が1773(安永2)年に創設した藩学造士館や1774(安永3)年創設の医学院にさかのぼる。造士館はその後、島津斉彬による改革によつてさらに充実し、ここで若者は切磋琢磨しながら勉学に打ち込み、進取の精神あふれる人間形成に努めてきた。これらの若者はその後、明治維新の原動力となる人材として活躍するのである。

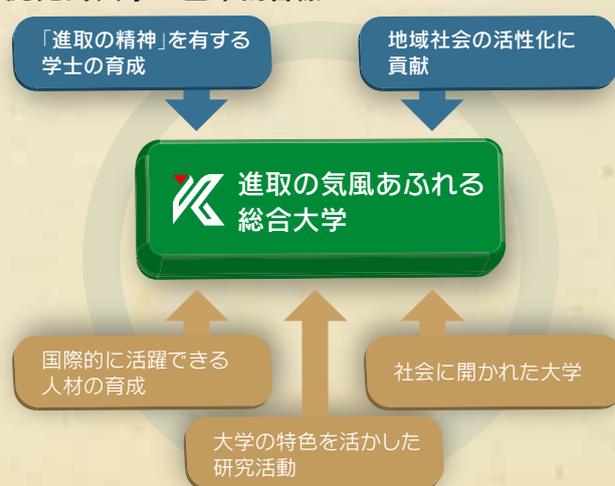
また、1865(慶応元)年には薩摩藩が国禁に反し、英国へ留学生を派遣した。いわゆる「薩摩藩英国留学生」である。留学生たちは帰国後、日本近代化のリーダーとなり、海外で事業を成功させたりす

るなど、時代を先取りし、物事に果敢に挑戦していった。

鹿大は、こうした若者を育んできた鹿児島の教育的伝統を受け継ぎ、地域とともに社会の発展に貢献する進取の気風にあふれる総合大学をめざしている。特に学生の「進取の精神」を育むため、平成22年度からの国立大学法人第2期境界に、さまざまな取り組みを始めている。また、「進取の気風」という言葉については、鹿大は平成21年に商標登録申請をし、平成22年9月17日特許庁から申請が認められ、商標登録された。今後、「進取の精神」「進取の気風」という言葉は鹿大の理想像を表すキャッチフレーズなどに積極的に活用され、社会に発信されていく。

それでは、学生の「進取の精神」を育むための取り組みの一つ、学生による「学生憲章」制定についてみていこう。

鹿児島大学の基本的目標



鹿児島大学は、「鹿児島大学憲章」に基づき、我が国の変革と近代化の過程で活躍した先人の意志を受け継ぎ、困難な課題に果敢に挑戦する「進取の精神」を有する人材を育成し、地方大学の存在意義を鮮明にして地域とともに発展する知の拠点を形成し、「進取の気風にあふれる総合大学」をめざす」としている。



「若き薩摩の群像」(JR鹿児島中央駅東口広場)
1865(慶応元)年に派遣された薩摩藩英国留学生を主題に制作された。昭和57年3月建立。高さ12.1m(台座部分9.49m)。作者は中村晋也鹿児島大学名誉教授(文化勲章受章者)

学生による 学生憲章制定の取り組み



鹿児島大学学生憲章公表の様子



学生憲章ワークショップ後の草案発表



学生憲章ワークショップの様子



吉田学長に学生憲章が手渡された

学生の、学生による 学生のための行動指針

「進取の気風あふれる総合大学」をめざすにあたり、吉田浩己学長は以前から学生憲章の制定を考えた。

「学生憲章とは、鹿大生の行動指針や規範となるものです。自ら目標を立て、それにチャレンジしていく中で、進取の精神は育まれる。そのためにも、学生が自身を客観的に眺め、豊かな人間形成をしていくことのできる指針となるものが必要です」と吉田学長は語る。

また、学生憲章は大学側が与えるものではなく、学生が自ら作り上げてこそ価値があると吉田学長は考えてきた。そこで、平成22年度から学生憲章制定に向けての作業が始まった。

憲章に盛り込まれた 鹿大生らしい表現

平成22年4月、教職員16名による「学生憲章ワーキンググループ会議」が立ち上がった。学生憲章の目

的や位置づけ、制定のための今後の作業の進め方などが議論された。

8月20日には、8学部から推薦された学生34名が参加する「学生憲章ワークショップ」が開催された。学生を4グループに分け、3時間ほどかけて学生憲章の草案をグループごとに作成した。

10月には、8月のワークショップ時にリーダーを務めた学生を中心とした「学生憲章作成委員会」を組織し、4回の会議を行った。この中で、学生らは教育・学生生活・課外活動などのカテゴリー別に内容を検討しながら、ワークショップ時に作られた4つの草案を1つに集約していく作業に取り組んだ。

10月中旬には大学ホームページで草案を公表し、学内外から広く意見を募ることも行った。その後、学生憲章作成委員会と学生憲章ワーキンググループ会議の合同会議を2回開催。学生たちは活発に議論を交わしながら、寄せられた意見を参考に一つひとつの言葉や表現を検討し、学生憲章を作り上げた。

作成過程における教員の役割は、必要があればアドバイスをするという程度に留められ、実際の策



福島英典さん
水産学部水産学科4年

今回、自分の意見が大学の役に立つならと思い、学生憲章作成に参加しました。

学生が初めて集まって意見を出し合った学生憲章ワークショップではグループごとに草案づくりを行いました。僕たちのグループでは「自分たちはどんな鹿大生でありたいか」というテーマで各々意見を出し合うことから始めました。自分たちより若い世代の目標になるようなものをつくりたいと考え、案を出していきました。最後にグループごとの草案をまとめ、皆の前で発表しました。他のグループと共通する言葉もあり、興味を持って聴きました。

10月からは、グループごとに出されていた草案を一つにまとめ、それに肉付けをしていく作業を行いました。「都会の大学のように何もかも恵まれてはいないからこそ、物事に果敢に挑戦し、努力していかなければ」という気持ちを学生らしい力強い言葉で表現したいと考えていました。最後の最後まで言葉の一つひとつを吟味し、足したり引いたりしながらやっと完成させることができました。

学生憲章ができたことについては嬉しいというより、ホッとしたというのが正直な感想です。やるからには途中で挫折することなく、きちんと作り上げたいと思っていましたから。後輩たちには学生憲章を指針として、有意義な学生生活を送ってもらえたらと思います。

鹿児島大学 学生憲章

私たちは、鹿児島大学の学生であることを誇りとし、学ぶことのできる環境に感謝し、桜島のように気高く、時には激しさを持ち、自らを磨き、未来を拓いていきます。

1. 私たちは、我が国の変革と近代化を推進した先人達の「進取の精神」を継承し、困難な課題にも果敢に挑戦し、強い意志と柔軟な心を持って自己実現を図ります。
2. 私たちは、幅広い教養を身につけ、高度で専門的な知識・技能を修得し、地球的視野を持って活躍する人間になることを目指します。
3. 私たちは、サークル活動などの課外活動に積極的に参加し、仲間との友情を育み、思いやり深く魅力溢れる人間になります。
4. 私たちは、地域社会との関わりの中で、一人の人間として責任ある行動を心がけ、社会に貢献できるよう全力を尽くします。

平成22年11月15日制定
(第61回鹿児島大学開学記念日)



「学生憲章制定に際し」

鹿児島大学長 吉田浩己

学生が自らの行動指針、規範である学生憲章を作り上げたことは大変素晴らしいことだと思っています。感激すると同時に、この憲章を作り上げられた学生諸君を誇りに思っています。

特に感銘を受けた点は、授業だけでなく課外活動、ボランティア活動などといった社会との関わりの中で人間力と進取の精神を涵養し、高い志を持って自己実現をめざすことを高らかに謳っていることです。このことは、人間力の土台をしっかりと作った上で困難に果敢に挑戦する人材育成をするという鹿児島大学の教育理念をしっかりと受け止めており、同窓会や国民の要望、期待にも応える内容になっています。

鹿大は進取の精神とともに、自主自律を基本理念としています。学生による学生憲章の作成はその基本理念の実践、具現化といっても良いと思います。

これから学生諸君には自ら作り上げた学生憲章を高々と掲げ、実践していただきたいと思います。皆さんが4年ないしは6年の学生生活において高いレベルでの自己実現をめざし、互いに切磋琢磨し、社会発展に積極的に参画されることを期待しています。

定作業は学生が中心となって進めていった。完成した学生憲章には学生らしい表現が盛り込まれ、鹿大生の熱い思いや意欲があふれ出た憲章となっている。

11月15日、第61回鹿児島大学開学記念日に合わせて学生憲章が制定され、12月1日には鹿児島大学学生憲章の公表のイベントが行われた。憲章作成に関わった学生を代表して高木裕介さん(工学部4年)、佐藤政宗さん(農学部4年)、松尾周悟さん(水産学部4年)、福島英典さん(水産学部4年)が全文を朗読し、吉田学長に学生憲章が手渡された。その後、福島英典さ

んが「私たち学生は学生憲章を胸に、強い意志と柔軟な心で学生生活を乗り多きものにしたと思います」と決意表明を行った。

学生憲章を制定している大学は全国的にみても少ない。また、学生が主体となって学生憲章を制定したのは、鹿大が全国で唯一である。今後は、学生憲章を大学案内や大学概要に掲載し、高校での進学説明会で紹介するなど、学生憲章の存在と意義を発信し、鹿大生の行動指針として活用していく予定だ。学生憲章を鹿大の教育にどう位置づけ、反映させていくかも今後の課題となるだろう。

学士課程教育改革の 取り組み

三本柱を見直し 鹿大独自の教育を 明確にする

「進取の精神」を持つ学生を育成するため、鹿大は学士課程教育の改革にも取り組んでいく。そのため、現在見直しや作成を進めているのが、アドミッション・ポリシーとディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの三本柱。この3つのポリシーを2、3年以内にすべて完成させる予定だ。

アドミッション・ポリシーとは、鹿大がどのような学生を入学させるかという方針。今後はアドミッション・ポリシーの核となる鹿大の全学部共通の部分再構築した上で、各学部学科の独自性をプラスしたアドミッション・ポリシーを作り上げることをめざしている。ディプロマ・ポリシーは、学士課程の卒業時に学生がどのような能力を身に付

けているべきかという方針。その能力の定義は文部科学省の中央教育審議会が提案する「学士力」の定義に基づいて作り込む。カリキュラム・ポリシーは、学士課程教育における具体的なカリキュラムに関する方針。それぞれの科目がディプロマ・ポリシーのどの部分を担っているかを明確にし、対応させる必要がある。これら3つのポリシーを整備していくためには、鹿大がどのような学士課程教育をめざし、独自性をどのようにに確立していくかが重要となる。そして3つのポリシーが整備されて初めて、鹿大の新しい教育の実践がスタートする。

共通教育科目構成の 再編と「履修カルテ」

学士課程教育改革の第一歩として、共通教育科目の構成の見直し

も進めている。現在の学問分野ごとの科目分類をやめ、学生が卒業時に身に付けていくべき「学士力」に基づいた分類を行う。将来は共通教育科目を「補習・導入教育プログラム」、「人間力養成プログラム」、「学力養成プログラム」、「専門基礎力養成プログラム」に大別。特に人間力養成プログラムには、学士力の要素として挙げられている「態度・志向性（自己管理能力、チームワーク、リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力）」が身に付くよう、体験型学習が多く、問題発見能力を養うような内容の科目を多く設ける予定だ。また、学生が学士力を身に付けるための学習・体験にどれだけの時間を費やしたかを記入する「履修カルテ」を作る構想もある。

鹿大はディプロマ・ポリシーを明確に設定し、それに沿った共通教育を実施することで、卒業時に十分な学士力を備えた学生を送り出すシステムを確立しようとしている。

将来の教養科目構成イメージ図



「学士力」とは？

- 1 知識・理解
(他文化・異文化に関する知識の理解、人類の文化、社会と自然に関する知識の理解)
- 2 汎用的技能
(コミュニケーションスキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力)
- 3 態度・志向性
(自己管理能力、チームワーク・リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力)
- 4 統合的な学習経験と創造的思考力

鹿児島大学のFD活動

鹿大では、全学規模のFD(ファカルティ・ディヴェロップメント)活動にも力を入れている。各学部の教員から組織された鹿児島大学FD委員会が中心となり、教員の教育・研究、管理、運営などの資質・能力開発につながる様々な取り組みを進めている。

平成22年度は学士課程教育改革の一環として、共通教育における学生の学習実態・学習成果についてアンケートを実施した。「進取の精神」を持った学生を育てるためにど

のような改善・整備が必要かを把握すること、「進取の精神」を既に備えている学生の行動特性から理想の鹿大生像を探ることなどをねらいとしている。

FD委員会を中心にフォーラムや勉強会等も開催している。平成22年12月には「FD・SD(スタッフ・ディヴェロップメント)合同フォーラム『大学改革の新たなステージへ』」と題し、FDにおける学生参加の可能性などについて議論がな



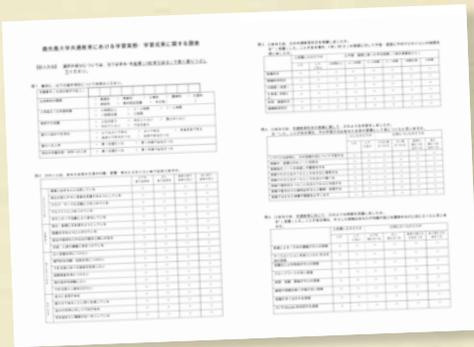
学生・教職員ワークショップ「鹿大のピア・サポートを考える」の様子(平成23年2月)

時代に合った
理想の大学教育を追い求めて

国立大学法人は6年を1期として運営されており、昨年が第2期に入っている。2期の6年間で、教育・研究・社会貢献のすべての分野において、さらに質の高い大学として生まれ変わるための取り組みを進めている。

中でも教育は、有用な人材を社会に送り出すという大学の基本的な使命を考えれば、大学として最も力を入れなければならない分野である。鹿大は、鹿児島島の良き教育的伝統は受け継ぎながらも、新しい取り組みに果敢に挑戦する鹿大ならではの教育の姿を作り上げたいという思いを、「進取の精神」という言葉に込めた。教職員全体で「進取の精神」を育む教育とは何かを考え、さまざまな改革に着手している。

今回紹介された取り組み以外にも、専門教育の質の保証するためのシステムの構築や全学的なカリキュラムの見直しなど、教育の充実に関する取り組みが数多く進められている。慢心することなく、常に時代に合った理想の大学教育を追い求め、鹿児島大学はこれからも挑戦を続けていく。



共通教育における学習実態・学習成果に関するアンケート用紙



FD・SD合同フォーラムパネルディスカッションの様子(平成22年12月)

された。平成23年2月には学生も交えて「鹿大のピア・サポートを考える」というワークショップを実施。学生による学生支援(ピア・サポート)制度整備のため、学生と共にピア・サポートへの理解を深め、実現のためのアイデア出しなどを行った。平成22年度中には授業への応用や鹿大生の現状把握に役立つ、教員のための『FDガイド』も発行する予定だ。今後も、それぞれのFD活動を有機的につなげて学生の声を丹念に拾い上げ、「進取の精神」を持つ学生を育てる取り組みに反映させていく。

世界の先頭を走る

フサカサゴ科の分類学者

鹿児島で「アラカブ」の名で呼ばれるフサカサゴ科の魚。総合研究博物館の本村浩之教授は、世界でただ一人のフサカサゴ科魚類の分類学者だ。魚の採集や標本・文献調査で世界中を飛び回り、魚類の中でも非常に分類が難しいとされるフサカサゴ科魚類の研究で世界の先頭を走る。また、日本で最も魚の種類が多い鹿児島県の魚類相調査にも力を入れている。



総合研究博物館
教授

本村 浩之

もとむら・ひろゆき／昭和48年静岡県生まれ。平成13年鹿児島大学大学院連合農学研究科修了。博士(農学)。日本学術振興会特別研究員として鹿大や国立科学博物館で勤務後、平成15年4月～平成17年3月日本学術振興会特別研究員としてオーストラリア博物館に勤務。平成17年4月～10月までオーストラリア博物館客員研究員。平成17年鹿児島大学総合研究博物館助教授に就任。平成22年6月から現職。専門は魚類分類学。国際自然保護連合(IUCN)種の保存委員として世界の熱帯性魚類のレッドリストの作成、International Steering Committee for Indo-Pacific Fish Conference日本代表委員として4年に一度開催される国際魚類会議の運営などを行う。日本魚類学会編集委員、鹿児島県自然愛護協会理事、鹿児島県レッドリスト見直しワーキンググループ「汽水・淡水産魚類」検討員、平川動物公園・かごしま水族館を活かした地域活性化プロジェクト推進協議会ワーキンググループ委員。



天皇陛下にカンボジアの魚類について説明をする本村教授(平成20年3月3日「魚類の系統と多様性に関する国際シンポジウム」)

総

総合研究博物館の本村浩之教授に届くEメールは、日に数百通に達する。内容は世界中からのフサカサゴ科の魚に関する問い合わせ。本村教授は世界で唯一の、フサカサゴ科魚類の分類学者なのだ。

分類が非常に難しい

フサカサゴ科魚類

フサカサゴ科の魚は海域や個体間の形態的変異がしばしば種間の相違より大きく、分類が非常に難しい。深海や岩陰に単独で生息する種も多く、全世界での正確な種数は誰にもわからないと本村教授は言う。「ある日、妻がスーパーで買ったカサゴを尾頭付きの刺身にしてくれたのですが、食卓に出た魚を見て、すぐに未記載種とわかりました。それほど研究が進んでいない魚なのです」。分類の難しさから「未記載種」の研究者の数は少なかったが、年配のアメリカ人研究者が相次いで引退し、現役でフサカサゴ科魚類の研究を中心に行っている分類学者は、世界でも本村教授ただ一人となった。

生物多様性を解明するための

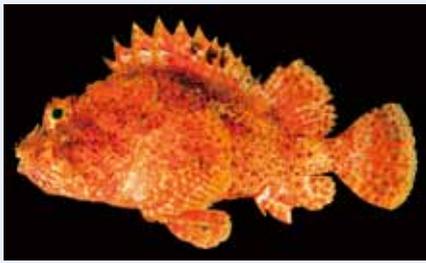
基礎的で重要な学問

本村教授の専門である魚類分類学は、魚類の進化・種分化のメカニズムの解明、生物地理学、形態学、既

* 未記載種 公表前の新種の呼称。

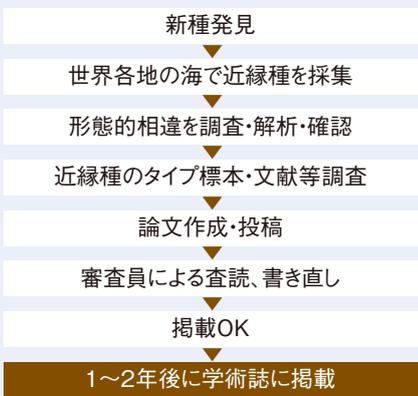
知種の再記載、新種の記載・命名などを含む学問である。「魚類分類学は魚を形態的に識別し、名前を付け、系統縁関係を推定し、進化の道筋を探る学問です。さらに特定の海域の魚類相調査によって種の多様性の程度もわかります。魚類分類学は、魚類の多様性を解明するために最も基礎的で重要な学問なのです」と本村教授は言う。

本村教授はこれまでに34種の魚を新種として発表してきた。新種というと華々しいイメージが先行するが、新種の発見は研究の「副産物」ではない、と本村教授は強調する。「最終的には、誰もが魚を検索・同定できるように情報を蓄積していくこと、世界共通の固有の学名を整理すること（ほぼすべての種は複数の学名をもつため、そのうちのどの学名を有効名とするか検討する）、魚類の多様性や進化・種分化のメカニズムを明らかに



本村教授が新種記載したカサゴ。
学名 *Scorpaena pepo*
和名「カボチャフサカサゴ」と命名

新種が記載されるまで



*一つの魚を新種として発表するのに数年~10年かかる

にすることこそが目標です」

魚類分類学における標本の重要性

魚類分類学では、研究対象となる魚の鱗や鱗ひらなどの外部形質、内臓や骨などの内部形質、DNAなど、何十項目にも渡る情報を集める。そのため重要なものが「標本」だ。さらに新種を発表する際には、「タイプ標本」が必要となる。「タイプ標本」とは、新種に名前を付けるときの基準となる特定の標本のこと。研究の客観性や再現性を担保するだけでなく、他の魚の新種記載の際の比較対象としても活用される。「西洋人は大航海時代から行く先々で生物を採集し、標本にしてきた歴史があります。シーボルトやペリーも日本で採集した魚の標本や絵を自国へ持ち帰っており、それらはタイプ標本として現在まで厳重に保管

されています。残念ながら、日本では標本を集めて保管することの重要性があまり理解されてきませんでした。日本の魚を研究する際も海外の古いタイプ標本や文献にあたる必要があります」と本村教授。

ある魚が新種かどうかを判断するには、まず、対象となる魚の雄と雌、幼魚と成魚を世界中の生息域で集め、標本にする。膨大な数の魚の標本作製・維持管理にはボランティアの協力が欠かせない。その後、魚の形態的識別を行い、近縁種との比較検討を慎重に行う。地理的な変異や奇形を新種と誤認するのを避けるためだ。「自ら出かけたり、取り寄せたりして近縁種のタイプ標本も調べるのですが、疑問が出てきた場合、タイプ標本の魚を採った200年前の人物の人生まで調べる必要があります。英語はもちろん、ラテン語やギリシャ語などの外国語ができなければ話になりませんし、現地の人の協力で船を出してもらうこともあるため、語学力・コミュニケーション力は重要。魚が傷まないうちに標本作りや調査をする必要がありますから、何日も連続で徹夜できる体力もなければいけません。世界中がフィールドですから、部屋にこもってはいけません。研究です」と本村教授。魚類分類学が進

んでいないカンボジアで、トンレサップ湖やアンコールワット遺跡環濠の魚類調査にも協力している。

日本一の多様性を持つ鹿児島県の魚類相を解明する

本村教授の目標は、全世界のフサカサゴ科魚類の分類学的研究を終わらせること。一つの魚を記載するのに10年かかる場合もあるため、なるべく多くの研究を同時進行させ、毎年数種ずつ発表していきたいと話します。また、魚類多様性が日本一といわれる鹿児島県の魚類相を明らかにし、魚類図鑑を作成することも計画している。平成22年には、屋久島の海の魚類951種を掲載した図鑑を完成させた。県内各地のボランティアと共同で鹿児島県の魚類コレクションの充実にも力を入れている。「鹿大の魚類標本は約10万点（登録済は4万点）、国内外への標本の貸出数は年間約70件10000個体。これはハーバード大学自然史博物館の貸出数に匹敵します。マレーシアとカンボジアの魚類コレクションは世界一の規模といっている。すべての標本は魚類のあらゆる研究分野の基礎となるものであり、人類共通の財産でもあります。これらを大切に管理・活用し、将来は南日本最大の魚類標本センターをめざします」

<魚類ボランティアを募集しています>

魚類標本の作製・登録・管理を行うボランティアを募集しています。経験不問。活動を希望される方はお問い合わせ先 motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp (本村浩之教授)までご連絡ください。



「水族館で働く獣医師の仕事」の講義風景。講師はかごしま水族館展示課展示第2係主任の大塚美加氏。就職までの経緯や業務内容について触れつつ、水族館獣医師になるためにやっておいたほうがいいことについても学生にアドバイスしていた

鹿大の新たな試み

Challenges of
Kagoshima University

「獣医師キャリア形成概論」開講 ～「公務員等獣医師」による職業教育の取り組み～

平成22年10月、農学部獣医学科では4年生を対象とした「獣医師キャリア形成概論」を開講した。講師は自治体やその出先に勤務する「公務員等獣医師」。学生がそれぞれの講師の仕事内容などを学びながら、公務員等獣医師の役割を理解し、自身の職業選択に役立てていくことをねらいとしている。

自治体の農林関係や公衆衛生関連の行政部局、畜産試験場、家畜保健衛生所、保健所、食肉衛生検査所、自治体が運営する動物園や水族館などを職場とする「公務員等獣医師」。動物を診る仕事もあれば、直接動物を扱わない仕事もある。部署によっては外へ出かけ、住民とコミュニケーションを取りながら、臨機応変に仕事を進めていくことも求められる。しかし、学生が公務員等獣医師に対して抱くイメージは「仕事が単調」、「デスクワークばかりなのは」、「動物に直接触れる仕事が少ない」というものだ。

公務員等獣医師に対する 固定化したイメージを払拭

平成22年10月、農学部獣医学科で「獣医師キャリア形成概論」が開講された。自治体やその出先機関などに勤務する現役の「公務員等獣医師」を非常勤講師に迎え、学生に公務員等獣医師の仕事について理解を深め、将来の職業選択に活かしてもらおうというユニークな科目である。

近年、獣医学科の学生の進路としては犬や猫などの伴侶動物を診る動物病院への就職が人気を集めている。一方、牛や豚、馬などの産業

動物に関わる職場、特に産業動物を扱うことの多い自治体への就職は少なめだ。実際の仕事内容を十分に知らないまま、公務員という選択肢をはじめから除外している学生もいる。

「大学としては、獣医師が社会の中のどのような分野で役立っているかを学生が十分に知っておくことが大事だと考えています。勉強のモチベーションも上がりますし、自分の適性に合った職業選択ができる。この講義で公務員等獣医師のバラエティに富んだ仕事内容を知ってもらいたいと考えています」と科目を担当する獣医学科の小島敏之教授は話す。

県や市の公務員等獣医師を 非常勤講師に

「獣医師キャリア形成概論」は、研究室に所属し、卒業後の進路について考え始める獣医学科の4年生を対象としている。ただし、獣医学科の5・6年生、大学院生、他学部の学生も履修登録なしで聴講することができる。講義は、鹿児島県や鹿児島市、その出先機関で働く現役の獣医師が担当。それぞれの講師がスライドや資料などを工夫し、具体的な事例を交えながら、学生に普段の仕事内容を伝えている。



農学部獣医学科4年
大里 麻衣子さん

獣医師の活躍できる世界にどういふものがあるのか知った上で職業選択をしたいと思い、「獣医師キャリア形成概論」の受講を決めました。それまでの公務員等獣医師に対するイメージは「デスクワークが多く、動物と直接触れ合うことはほとんどないのではないか」ということでした。将来、動物と直接関わるような仕事に就きたいと考えているため、公務員以外がいいのではないかと考えていました。

しかし、講義を受けてみて公務員等獣医師に対するイメージが変わりました。部署によって仕事の内容は全く違います。デスクワークだけでなく、動物と接する職場も意外と多いことが分かりました。また、以前は公務員等獣医師というと保健所か動物園ぐらいしか職場を想像できませんでした。こんなにさまざまな職場があるのだということも分かりました。現役の公務員等獣医師の方の話を知ると、皆さん仕事に本当に好きで、一生懸命仕事に打ち込んでおられるんだというのがわかります。そうすると、その現場への興味がわいてきます。

公務員になるつもりはないという理由で受講しない人もいますが、仕事の内容を知らずに将来の可能性を狭めるのはもったいないと思います。私はこの科目を受講して、獣医師の進む道はこんなにあったのかと世界が広がった気がしました。興味のある人もそうでない人も、ぜひ受講してみてください。

獣医師キャリア形成概論の講義内容

- 県庁畜産課で働く獣医師の仕事(全4回)
 - ・畜産の振興方策立案、農家の経営支援、鹿児島黒牛・かごしま黒豚のPRや販路開拓;畜産農家の経営安定を目的とした畜産物の価格安定対策などの畜産振興対策;耕種部門と畜産部門の連携による飼料の確保対策;口蹄疫などの海外悪性伝染病の予防・蔓延防止のための業務などを紹介
- 市の保健所で働く獣医師の仕事
 - ・犬の予防注射から飲食店、理美容室、銭湯、ホテルなどの衛生指導などバラエティに富んだ仕事を紹介
- 県の試験研究機関で働く獣医師の仕事(全2回)
 - ・鹿児島黒牛の短期肥育技術の開発といった直接農家に還元できる技術の開発・研究、肉質・食味向上を目的とした鹿児島黒牛のDNA解析など新技術を活用した和牛の研究などを紹介
- 県庁生活衛生課で働く獣医師の仕事
 - ・首輪のついてない犬の通報、ペットショップを開きたいという相談など、多岐に渡る仕事を紹介
- 動物園で働く獣医師の仕事
 - ・飼育係や他の動物園、研究機関と連携して動物の健康を保つ動物園の獣医師の仕事を紹介
- 県の家畜保健衛生所で働く獣医師の仕事
 - ・家畜伝染病の発生や蔓延防止のための衛生・防疫指導、病気の検査・診断などの仕事を紹介
- 水族館で働く獣医師の仕事
 - ・魚類から哺乳類までさまざまな生き物のいる水族館の獣医師の仕事を紹介
- 農業共済組合連合会で働く獣医師の仕事
 - ・家畜診療所の獣医師の仕事、診断をサポートする検査体制や診断などについて紹介
- 県の食肉衛生検査所で働く獣医師の仕事
 - ・食肉検査を中心とした精密検査の重要性について紹介
- 県と市で分担協力している食肉衛生検査
 - ・県と市で分担協力していると畜検査、食肉処理場と食検の役割などについて紹介
- 市の農林部門で働く獣医師の仕事
 - ・畜産農家の経営安定指導、受精卵移植技術を用いた優秀雌牛の確保などについて紹介

最終回の講義では、これまでの講義が学生自身の進路選択にどのような影響を与えたかを自由に話し合うディスカッションの時間を設けた。こうした時間を通して、獣医師にとってのコミュニケーション能力の重要性を知ってほしいと小島教授は語る。

「言葉を話すことのできない動物の病状を把握するには、その飼主とコミュニケーションを取ることが不可欠です。また、農家の人たちに提案やアドバイスをしなければ

一口に公務員等獣医師といってもさまざまな職場があり、仕事内容は異なる。仕事のやりがいや面白さ、苦勞も職場によって違うだろう。実際の仕事内容を公務員等獣医師の生の声で伝えることは、学生たちの公務員に対する意識を変えるはずだ。

また、講師には鹿大の卒業生が多く、講師にとっても若い学生と触れ合える良い機会となっていると小島教授は語る。「講師の方々からは後輩でもある鹿大生に話をするのは身の引き締まる思いがするし、仕事の励みにもなるという感想を聞いています」。先輩である獣医師たちがいきいきと働く姿は、学生たちのロールモデルにもなるだろう。

勉強できるような演習の時間も組み込んでいけたらと考えています。鹿児島は肉牛、豚、ブロイラーの生産が日本一の畜産県。鹿児島県の畜産を支える獣医師も養成できるように、さらに内容を充実させていきたいと思ひます」と小島教授は語る。

優れた獣医師を養成するための職業教育を取り入れた例は全国でも珍しい。鹿大の「獣医師キャリア形成概論」を受講した学生がどのような獣医師になつていくか、これからが楽しみである。

畜産県・鹿児島を
支える獣医師を養成

現在、鹿児島大学農学部獣医学科は産業動物の診療に力を入れているが、毎年、獣医学科の卒業生の約3分の1は伴侶動物を診る民間の動物病院に就職する。

「将来は伴侶動物の診療をしている動物病院の獣医師も講師として招きたいと考えています。また、学生が講師の仕事場で1週間ほど

ならないこともある。獣医師は動物だけを相手にしていればいい仕事ではありません。社会に出れば人と話し合い、理解し合つて仕事を進めていかなければならないことも学んでほしいと思ひます」

「水族館の仕事って

何て楽しいんだ！」

と思いましたがよ。

アラムナイ追跡隊

interview

**Makoto
SOICHI**

名古屋港水族館
館長

祖一 誠さん

● profile

1947年兵庫県生まれ。兵庫県立三木高等学校卒業。70年鹿児島大学水産学部卒業。同年、開館前の鴨川シーワールドに入社。業務課長、企画室長、動物展示課長、海獣展示課長、総務課長を経て、99年館長就任。2007年から同顧問(国際海洋生物研究所長兼務)。08年6月(財)名古屋みなと振興財団顧問就任。08年11月名古屋港水族館長、(財)名古屋みなと振興財団常務理事就任。著書に『海獣水族館～飼育と展示の生物学～』(村山司・祖一誠・内田詮三編著、東海大学出版会、2010年)、『研究する水族館～水槽展示だけではない知的な世界～』(分担執筆、東海大学出版会、2009年)などがある。

※「アラムナイ」とは英語で同窓生のこと。
各界で活躍する鹿児島大学の卒業生や
留学生などのユニークな活動を紹介します。



1968年に合宿で訪れた与路島で。手に持つのは水中カメラ「ニコノス」

生き物の繁殖は水族館の最低限の義務

名古屋港水族館長に就任して2年が経ちます。今後力を入れたいのは、何といてもシャチの繁殖です。今年は繁殖のために2頭のシャチを迎えることにしています。当館には複数頭のシャチを飼育できる設備が整っていますが、自然界と比べれば当然狭い。人間の都合で捕獲してきた野生生物を狭いところで繁殖させるなんてかわいそうと言う人もいます。それでも人間の都合で水族館に連れてきたからこそ、自然に近い形で繁殖をさせ、その子どもを大事に育てていくことは水族館の最低限の義務だと考えています。生き物の子育ては素晴らしいものです。誰が見ても感動しますよ。生き物を通じて、できるだけ多くの人々に命の大切さを感じてほしいと思っています。

海洋生態研究会で過ごした海三味の4年間

鹿大へ入学してすぐ、海洋生態研究会というサークルに入りました。スキューバダイビングで海に潜って海洋生物の調査をするクラブでしたが、当時はスキューバダイビングの走りの時期。タンクが数本しかなく、1、2年生は空気を吸わせてもらえないんです。それでも素潜りで錦江湾に潜ってみると、見たこともない魚が泳いでいる。熱くなりやすい性質ですから「これはすごい！」とすぐに夢中になってね。最新式の水中カメラ「ニコノス」を買ってもらい、写真を撮ってやたらと人に見せて回りました。大学の単位は効率良く取るようにして、空いた時間はもっぱら海。普段は錦江湾の調査が中心でしたが、夏には与論島、与路島、座間味島、加計呂麻島、竹富島など、離島へも随分行きました。潮焼けで髪が茶髪になったほどです。



鴨川シーワールド時代、作家の北杜夫氏命名のマンボウ「ナンナン」に水中で餌を与える祖一さん

海三味の4年間を過ごして、卒業後も南の海をフィールドに仕事をしたいと考えていたところ、翌年オープンする鴨川シーワールドに就職しないかという話がありました。もつと海に出るような仕事がいいとも思いましたが、返事を急かされて軽い気持ちで承諾したんです。

水族館の仲間とシャチの生け捕りに挑戦

鴨川シーワールドはシャチを目玉にした水族館にするということでしたが、僕の入社したころは、まだ導入のめどが立っていませんでした。そこに飛び込んできたのがシャチが東京湾に迷い込んだというニュース。生け捕りにしようと勇んで仲間と海へ出ました。しかし、相手は優れた学習能力を持つシャチです。われわれの網をすり抜けていとも簡単に逃げていってしまっただけです。これが日本で初めて飼育されたシャチなんです。シャチ飼育の歴史をずっと見てきましたから、シャチには非常に思い入れがあります。マンボウも思い入れの強い魚です。マンボウは飼育できません。昔は10日間前後しか飼育できませんでしたが、餌の種類や量、水温などに工夫を重ね、飼育世界記



カナダのチャーチルで、アメリカの水族館シーワールドの職員と一緒にブルーガを運ぶ祖一さん(左から2人め)

録を作りました。その記録は今も破られていません。軽い気持ちで就職した水族館でしたが、次第に「水族館の仕事って何て楽しいんだ！」と思うようになりました。

99年に館長になりましたが、そのプレッシャーは凄まじいものでした。飼育数が多いので、いつもどろろかが体調を崩している。出産や死亡のニュースに一喜一憂する。不景気になって経営面での気苦労も多かった。でも生き物はいつか死ぬし、生まれることもある。生きているときにベストを尽くし、死んでしまっても、そこから新たな情報を得て次の命につなげていこうと考えるようになりました。

名古屋でやりたいことはまだまだたくさんあります。生き物の素晴らしさをできるだけ多くの人に伝えるために、これからも仕事をしたいです。



鹿大のグラウンドで

教員になること、鹿大ラグビー部で
全国大会に行くことが目標です。



下山 翔平さん

教育学部学校教育教員養成課程
保健体育専修1年
[長崎県出身]
長崎県立長崎北高等学校卒業



平成22年8月、バンコクで開催されたARJCでの試合風景。中央のヘッドギアを着けた選手が下山さん

ラグビー部に所属する教育学部の下山翔平さんは、平成22年8月アジアラグビージュニアチャンピオンシップ(ARJC)のユース日本代表(U20)に選出された。九州から選出されたのは、下山さんただ一人。大抜擢だ。「大学に入ったら九州代表をめざしたい」と思っていました。まさか日本代表に選ばれるとは。嬉しかったですね。日本代表となつてからは、日本ラグビーフットボール協会ヘッドコーチの下でメンバーと共に練習に励んだ。短期間の練習だったが、体つきが変わつたという。

下山さんはその後、タイ・バンコクで開催されたARJCの全試合に出場。日本代表チームは優勝を成し遂げた。日本は平成23年5月、アジアで行われる世界大会、ジュニアワールドラグビートロフィー2011に出場する。「選考合宿で再び選ばれないと世界大会には出られないため、2月の選考合宿では頑張ります。5月の世界大会には絶対に出たいんです」

下山さんの将来の目標は教員になること。子どもと一緒にいるのが楽しいのだそう。自分が幼稚なのかもしれませんが、子どもと遊ぶのが好きですね。小学校もいいけど、中学校か高校の教員になつてラグビーを教えられたらとも思い、まだ迷っています。

ラグビーで活躍するなら私立大学でも良さそうだが、鹿大を選んだ下山さん。その理由を「ラグビーだけでなく勉強もきちんとしたかったから」と話す。

「教員採用試験に通ること、鹿大のラグビー部で全国大会に行くことが学生時代の一番の目標です。鹿大のラグビー部の個々のスキルは強豪校にも負けていません。個々の体力・筋力を付けて全国大会に進めるように頑張りたい。悔いが残らないよう、勉強、部活、遊びなど、何でも楽しんで学生生活を送りたいですね」

私の座右の銘

ナナイロコトバ

「ご飯はおかず」

体力をつけるために、食事はしっかり摂ります。特に白いご飯が大好きです。しっかりと食べて、勉強もスポーツも頑張る、充実した学生生活を過ごしたいと思っています。

ご飯はおかず

下山翔平



学長表彰を受ける下山さん(平成22年10月19日)

焼酎学講座研究棟“北辰蔵”外観



官能試験室での利き酒の様子



学生による蒸留実験



実験用の中が見えるガラス蒸留機

日本唯一の焼酎学教育・研究拠点として

郡元キャンパスにある焼酎学講座研究棟は、農学部焼酎学講座の教育・研究を目的に、平成19年7月に竣工しました。焼酎蔵をイメージしたこの2階建ての研究棟が北辰通りの近くにあること、また日本における焼酎学の発信地として北極星のように光り輝きたいという意味を込めて、「北辰蔵」という愛称が付けられました。

焼酎学講座は平成18年4月に鹿児島県、鹿児島県酒造組合連合会（現・酒造組合）、鹿児島県下の全酒造業者・関連業界からの寄附により設置された寄附講座です。北辰蔵もその寄附により建設されました。焼酎の教育・研究に特化した設備を備えた研究棟により従来の施設ではできなかった実習や実験が可能となり、大学にいながらにして、焼酎づくりの基礎を学ぶことができるようになりました。

1階には麹菌を培養する麹室（こうじむろ）、麹を手作りする際に使用する諸蓋（もろぶた）、もろみの発酵を促す発酵室、蒸留の様子が見えるガラス製蒸留機、新型蒸留機の試作機などがあります。2階は麹やもろみ、焼酎を分析する機器、機能性や味の成分を解析するための装置、利き酒用の官能試験室などがあります。

北辰蔵の利用は、焼酎学講座の学生が中心です。そのほか、焼酎学講座に所属する社会人大学院生の研究、かごしまルネッサンスアカデミーの実習、文部科学省からSSH（スーパーサイエンスハイスクール）に指定されている錦江湾高等学校の生徒による焼酎づくり体験、民間の酒造会社の研究などにも活用されています。

平成23年度から、寄附講座「焼酎学講座」は「農学部附属焼酎・発酵学教育研究センター」として新たに生まれ変わります。北辰蔵を拠点に、焼酎だけでなく発酵食品や焼酎文化の領域まで網羅した新しい教育研究機関として、学内外との連携をさらに進めていきます。

焼酎学講座研究棟 “北辰蔵”

〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-24

TEL 099-285-7111 (代表)

<http://chem.agri.kagoshima-u.ac.jp/Shochu/index.html>

<http://www.agri.kagoshima-u.ac.jp/NewHP/outline/sigen/index4.htm>

▶ 徳之島フォーラムを開催 ～世界自然遺産登録をめざして～



吉田学長挨拶

鹿児島大学は1月10日、大島郡伊仙町において、鹿児島環境学の一環として徳之島フォーラム「徳之島の未来、世界遺産～島の暮らし・産業・環境はどのように変わっていくのか～」を開催し、鹿児島大学、環境省、鹿児島県、徳之島町、天城町、伊仙町の関係者など約440名が参加しました。はじめに、吉田浩己学長、渡邊綱男環境省自然環境局長から挨拶があった後、石上英一人間文化研究機構理事が「日本史の中の徳之島」、小野寺浩鹿児島大学学長補佐が「徳之島という地域－自然、社会」と題して基調講演を行いました。引き続き、第1部「徳之島とは何か」、第2部「徳之島の地域づくりを考える」をテーマにパネルディスカッションが行われ、鹿児島環境学ワーキンググループ、地元3町長、パネリストなどによる意見交換が行われました。

最後に、奥田直久環境省那覇自然環境事務所長の提案による「徳之島フォーラム宣言」を採択し、世界自然遺産登録をめざすことを確認しました。



パネルディスカッション

▶ 「海王丸」船長らが水産学部長を表敬訪問 霧島丸慰霊碑へ献花

2月7日、独立行政法人航海訓練所の練習船「海王丸」の甲斐繁利船長、三好直巳機関長、巢籠大司次席一等航海士が、訓練航海で鹿児島に寄港した際、水産学部を訪れました。今回の訪問は、魚水会(水産学部同窓会)の依頼により実現したもので、3氏は、野呂忠秀学部長を表敬訪問し、霧島丸慰霊碑へ献花を行いました。

霧島丸は、水産学部の前身である鹿児島商船学校の練習船で、昭和2年に練習航海中の暴風雨で行方不明になり、多くの犠牲者が出ました。この事故を機に海王丸が建造され、安全な航海訓練が可能になりました。甲斐船長は、「悲惨な事故を二度と起こしてはならない。この経緯を後輩に伝えていきたい」と語りました。



慰霊碑に敬礼する甲斐船長(左)と三好機関長

▶ 男女共同参画シンポジウムを開催 ～板東文部科学省生涯学習政策局長が講演～



講演する板東局長

男女共同参画推進室は、11月26日、稲盛会館において「男女共同参画“muse篤姫”シンポジウム～一人ひとりが伸びやかに、自分らしく輝ける大学をめざして～」を開催し、学内教職員・学生のほか、自治体関係者など約230名が参加しました。シンポジウムでは、文部科学省の板東久美子生涯学習政策局長が「大学における男女共同参画の実現を目指して」と題し基調講演を行い、組織の活性化に不可欠な人材登用・育成に向けた環境整備や意識改革の重要性について述べました。引き続き行われたパネルディスカッションでは、「鹿大スタイル」の多様な支援体制の構築の必要性などについて、活発な討論が行われました。

また、シンポジウムにおいて、このほど学内公募で採用された男女共同参画推進室のロゴマークの公表と受賞者の表彰も行われました。



鹿児島大学
男女共同参画推進室
ロゴマーク



パネルディスカッション

▶ ピア・サポートを考える 学生・教職員ワークショップを開催

2月15日、平成22年度学生・教職員ワークショップ～鹿大のピア*サポートを考える～を開催し、教職員・学生48名が参加しました。参加型ワークショップでは、小貫有紀子九州大学特任助教が、対話のルール等を説明した後、参加者はグループ毎に、ピア・サポートに期待すること、自分にできることなどについて対話しました。また、杉本和弘教育センター准教授が、今後導入を検討していく予定である鹿大の新しいピア・サポート制度「平成郷中サポーター(仮称)」を紹介しました。教職員・学生が平等に意見を出し合うことで学生支援の現状や課題を再認識し、ピア・サポートの可能性を全員で見出せた有意義な機会となりました。

*ピア…同僚、仲間



参加型ワークショップの様子

▶ 平成22年度学長表彰被表彰者

鹿児島大学では課外活動等で優秀な成績を修めた本学の学生、または本学の学生で組織する団体に対し、「学長表彰」を行っています。今年度の被表彰者は以下の通りです。

下 山 翔 平 教育学部1年 ラグビー部所属	アジアラグビージュニアチャンピオンシップ出場(U20日本代表) (平成22年8月22日～平成22年8月28日 タイ・バンコク開催)
ロボット研究会 薩摩エンジニアーズ	NHK大学ロボコン2010-ABUアジア・太平洋ロボコン代表選考会- 決勝トーナメント進出(予選6位) デザイン賞受賞(平成22年6月6日)
校友会吹奏楽団	第54回九州吹奏楽コンクール 金賞受賞(平成21年8月29日) 第55回九州吹奏楽コンクール 金賞受賞(平成22年8月28日)
永 野 麻 理 教育学研究科2年 陸上競技部所属	・天皇賜盃第79回日本学生陸上競技対校選手権大会 女子200m 5位 (平成22年9月12日) ・2010日本学生陸上競技個人選手権大会 女子400m 7位 (平成22年6月20日) ・第65回国民体育大会 成年女子400m 8位(10月4日) 成年少年共通女子4×100m 8位 (平成22年10月5日)
原 田 英 世 工学部4年 陸上競技部所属	第94回日本陸上競技選手権大会 男子800m 6位(平成22年6月6日)
久 島 貴 大 農学部1年 陸上競技部所属	秩父宮賜盃第63回西日本学生陸上競技対校選手権大会 男子走高跳優勝(平成22年7月4日)
校友会剣道部	第58回全日本学生剣道優勝大会敢闘賞(ベスト8)(平成22年10月31日)
クワティ・レオナルド 理工学研究科博士 後期課程生命物質 システム専攻3年	2010環太平洋国際化学会議 学生ポスター賞(2010年12月15日～20日)
歯学部 男子バレーボール部	第42回全日本歯科学生総合体育大会バレーボール部門男子の部第1位 (平成22年8月8日)

▶ 留学生会がインターナショナルナイトで歌や踊りを披露

鹿児島大学留学生会(KUFSA)は11月28日、鹿児島市の鴨池公民館において、インターナショナルナイトを開催しました。毎年、留学生会が、日頃お世話になっている学生や教職員、また地域の人々への感謝の意を込めて開催しています。今回は、前田芳實理事(研究担当)をはじめ、学生、教職員や市民など600名以上が参加しました。会場では、各国の留学生やその家族による歌やダンス、日本人グループによる手品や踊り、民族衣装によるファッションショーなどが行われたほか、各国の手作りの料理が振る舞われ、参加者は、それぞれの国の料理に舌鼓をうちながら、和やかに懇談しました。



ファッションショー

▶ 水産学部「おさかなまつり」でかごしま丸を一般公開



マグロ解体ショー

水産学部は、11月13日、鹿児島市の谷山港で「おさかなまつり」を開催しました。このイベントは今回初めて実施されたもので、練習船かごしま丸が一般に開放され、航海に出かけた学生や教職員が船内を案内しました。船上では、航海実習で捕獲したマグロの解体ショーが実施され、来場者約200名にマグロの刺身とヒラツメガニの味噌汁が振る舞われました。また、学生による水産学部ポストカードとロゴデザインの優秀作品が展示されたほか、カサゴやチカメキントキなどを使った魚拓大会も行われ、多くの子どもたちが熱中していました。

▶ 県内外企業102社による学内個別企業セミナーを開催

就職支援センターは、2012年3月卒業・修了予定の学生を対象に、2月8日から18日にかけて「学内個別企業セミナー」を開催し、期間中1456名が参加しました。このセミナーは、学生に県内外の様々な企業や官公庁との出会いの場を提供するため、例年集約的に開催しているものです。今回は、91社・11機関が参加し、講義形式で各人事担当者から事業概要や募集職種等について説明が行われました。セミナーに参加した学生は、熱心にメモを取り、また講義後には質問するなど、就職環境悪化の中、就職活動への意識の高さと真剣さが感じられました。



セミナーの様子

理工学研究科與倉教授と農学部三角教授に科研費審査員表彰

独立行政法人日本学術振興会(JSPS)の平成22年度科学研究費補助金審査委員表彰に、與倉昭治理工学研究科教授と三角一浩農学部教授が選考され、11月22日、学長室において授与式が行われました。同補助金は、人文・社会科学から自然科学まで全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる学術研究を進展させることを目的とする競争的研究資金で、独創的・先駆的な研究に対する助成を行うものです。今年度は約5,000名の第1段審査(書面審査)委員の中から39名が選考されました。



手前左から與倉教授、吉田学長、三角教授

“食と健康”シンポジウムを開催



パネルディスカッション

11月27日、稲盛会館において、「鹿児島大学“食と健康”シンポジウム」を開催し、企業・県関係者、一般市民のほか、教職員、学生など約100名が参加しました。中期計画のコア研究プロジェクトと位置づけている“島嶼”、“環境”、“食と健康”の3つのテーマのうち、“食と健康”に関する研究の推進のため開催したものです。シンポジウムでは、前田芳實理事(研究担当)から挨拶があった後、First Session“食の機能性を科学する”として、長野正信氏(坂元醸造(株))・米元俊一氏(薩摩酒造(株))・下園英俊氏(農産物加工研究指導センター)・侯徳興氏(鹿児島大学)・宇都浩文氏(鹿児島大学)・小松正治氏(鹿児島大学)が、食の機能に関するこれまでの研究成果を発表しました。Second Sessionでは、“機能性食品の開発を目指して”をテーマに機能性を生かした企業の課題についてパネルディスカッションが行われました。

鹿児島大学と鹿児島県酒造組合の共同で「鹿児島宇宙焼酎ミッション」を始動

JAXAの国際宇宙ステーション日本実験棟「きぼう」有償利用事業に県内で初めて採択された「鹿児島宇宙焼酎ミッション」が今春始動します。この取組みは鹿児島大学と鹿児島県酒造組合の共同で鹿児島大学の焼酎学講座、宇宙環境医学講座を中心とする研究者からなる同ミッション実行委員会(代表:鮫島吉廣農学部教授、事務局長:馬嶋秀行歯医学総合研究科教授)と県内酒造メーカー12社が発起したものです。今和泉島津家屋敷跡周辺の土壌から分離した篤姫ゆかりの酵母を含む数種類の焼酎酵母と麴を、4月に打ち上げ予定のスペースシャトル(STS-134ミッション)・エンデバー号に搭載し、約10日間「きぼう」で保管された酵母と麴を使って「宇宙焼酎」を作り、地域の活性化をめざします。



高校生を対象に「鹿児島県合同進学ガイダンス」を実施



授業の様子

12月12日、鹿児島大学で、平成20年度文部科学省戦略的大学連携支援事業「鹿児島はひとつのキャンパス」(代表校:鹿児島大学)の一環として、鹿児島県下の高校生、保護者を対象に、県内11の国公立大学・短期大学の連携による合同進学ガイダンスを開催しました。県下全域の20数校から300名を超える高校生が参加した今回のガイダンスでは、進学・進路の選択に活用してもらうため、県内の大学・短期大学で学べる学問を19の分野に分けて紹介しました。今年は、「地学地生(ちがくちしょう)」と題してグローバルな素材の宝庫である地域に学び地域に生きる魅力を伝える全体講演や分野ごとの授業が行われたほか、「教員による学問分野別相談コーナー」、「在学生による各大学等のキャンパスライフ紹介コーナー」が設けられ、参加した高校生は、熱心に授業を受けたり、関心のある学問分野への進学について相談したりしていました。

鹿児島県民にとって 一層身近な大学になってほしいと思っています。

出水市長

渋谷 俊彦氏



平成21年12月21日、出水市は鹿児島大学と包括連携協定を締結しました。出水市を素晴らしいまちにしていくなために、鹿大の先生方の知恵をお借りして、市政に役立てていこうとの考えからです。

■ 包括連携協定以前から続く出水市と鹿大の関係

鹿大とは包括連携協定締結以前からもさまざまな形で連携してきました。出水市は毎年シベリアからツルが越冬に飛来することで有名ですが、周辺の田畑ではツルによる作物の食害が起っています。こうしたツルの食害対策について鹿大農学部の先生方を中心にご指導を頂いてきました。また、平成22年12月に発生した高病原性鳥インフルエンザの診断の際にも鹿大の先生に大変協力を頂きました。おかげで状況は落ち着きつつあります。

協定締結後は、これまで関係を結んできたテーマ以外にも、鹿大と連携したまちづくりを進めていきたいと思っています。老朽化した橋の長寿命化対策、景観法に基づいたまちづくり、九州新幹線全線開業に伴う新たな観光施策などについて鹿大のお知恵をお借りたいと思っています。

■ もっと県民全体にとって身近な大学に

鹿大は総合大学として、さまざまな分野で活躍する人材を社会に送り出しています。ここ出水市役所にも鹿大の卒業生がたくさん就職しており、それぞれの職場で頑張っています。

ただ、出水市民からしますと鹿大は少し遠い存在であることも確かです。出水市にキャンパスがあるわけではありませんから当然かもしれませんがせっかく県内の自治体と包括連携協定を締結しているのですから、鹿児島県全体で大切にしなければならない大学だと思ってもらえるような取り組みをしてはどうでしょうか。例えば、年に1、2回、「鹿児島大学出

水教室」というような公開講座を開催するなどの取り組みもいいかと思います。そうすれば、県民に対する鹿大の存在意義をアピールすることにつながるでしょう。鹿大が私たち県民にとって、もっと身近な存在になるよう期待しています。

■ 学生時代から地域に関わり視野を広げて

鹿大生へのアドバイスもあります。それは学生時代のうちにたくさん読書をしてほしいということです。卒業したらすぐに一人前の社会人としてのふるまいが求められますが、読書は人格形成にとっても役立ちます。時間のある学生時代のうちにたくさんの本を読んで、感性を豊かにし、人格形成に努めてほしいですね。

市役所の職員にも言っているのですが、今の時代は前例を踏襲しては対処できないようなことばかりです。大学にはカリキュラムに工夫をしていただき、時代や社会の変化に対応できるような学生さんを育ててもらいたいですね。学生さん自身も、物事に果敢に挑戦していく勇気を持ってほしい。以前、出水市の自治基本条例策定作業に市民関わったことがあり、その中に鹿大生もいたことがあります。彼は地域のことに関心を持ち、大変積極的に意見を述べていました。学生のうちから、ぜひ自分の住んでいる地域に進んで関わってみてください。視野が広がり、物事に柔軟に対処する姿勢も身に付くと思います。

しぶや・としひこ／昭和17年出水市生まれ。昭和42年東洋大学経済学部卒業。代議士秘書などを経て、昭和57年合併前の旧出水市議会議員に初当選。平成7年3月まで市議を4期務める。平成2年11月～平成4年11月旧出水市議会副議長。平成4年11月～平成6年11月旧出水市監査委員（議員選出）。平成11年～18年3月旧出水市長を2期務める。市町村合併後初の出水市長選挙で当選を果たし、平成18年4月から現職（2期目）。

▶ 学長が女性研究者と懇談

男女共同参画推進室では、2月18日、吉田学長と女性研究者16名との懇談会を開催しました。これは、女性研究者のニーズを直接聴くことで、教育研究及び就業環境の整備や各種支援の充実に資することを目的として、吉田学長の提案により、初めて企画されたものです。懇談会では、保育所設置、学会参加中等の一時保育支援や管理職層の意識改革など、幅広い要望や意見が出されました。最後に、吉田学長が、「相談窓口の活用の促進、アンケートなどを通じて、構成員のニーズを集約しながら、多様な環境整備や支援策の充実に図るとともに、教職員への意識啓発を継続的に行っていきたい」と抱負を述べました。



懇談会の様子

第9回 探訪 かごしま



薩摩おごじょの知恵

鹿児島大学法文学部
原口 泉 教授

「薩摩おごじょ」は、おごじょ(娘さん)に薩摩の国名を冠した言葉ですが、私は特定地域の女性を総称するこのような例を他に知りません。

土佐の「はちきん(4人の男を手玉に取るようなお転婆)」、宮崎の「日向かぼちゃ」や「秋田小町」など女性を表した言葉は、ほとんど顔かたちや器量を表したもののようです。

方言学者の橋口満さんによれば、「おごじょ」は「おご(娘)」に「じょ」という愛称の接尾語が付いた言葉だそうです。鹿児島では、篤姫が生まれた天保初年(1830年代)には使われていました。以来、この言葉は今でも生きています。その証拠に、芋焼酎、郷土料理店名まで、^{まいきよ いとま}枚挙に遑がありません。

何より嬉しいことは、「薩摩おごじょ」は、他の揶揄言葉に見られるようなマイナスイメージが無く、むしろ鹿児島の女性を高く評価しています。

このような「薩摩おごじょ」と言えば、私の頭には、篤姫と



祖父・樺山資紀に抱かれた白洲正子
大正4(1915)年頃
写真提供:旧白洲邸 武相荘

白洲正子の二人が思い浮かびます。篤姫は、第13代将軍徳川家定の御台所。夫亡きあとの大奥を束ね、江戸城無血開城と徳川家存続に功績がありました。

東京生まれの白洲正子は生涯「薩摩おごじょ」を自認していました。正子の祖父が維新の元勳樺山資紀だったからです。正子は都心で育ちましたが、祖父母の薫陶を受けていたようです。また、女性としてはじめて能舞台上立つほど、型破りの人でした。祖父のことは、祖母の言いなりになる薩摩単人だったと回想しています。

私は、鹿児島の女性は、昔から男性(夫)を誉めるのが上手だったと思います。

明治15(1882)年、蒲生村の婦人会では、自分たちの生活目標を「婦人心得百ヶ条」として掲げました。その中に「夫の機嫌を取る稽古をすること」とあります。これこそ「薩摩おごじょ」の知恵でしょう。

● 学生支援寄附金のご案内

鹿児島大学では、学生支援を目的とした寄附金を募集しています。寄附は一口5,000円から。事業内容については、学生生活課(TEL 099-285-7331)までお問い合わせください。詳細はhttp://www.kagoshima-u.ac.jp/side_menu/application_form.htmlをご参照ください。

お知らせ

● 施設の貸出のご案内

鹿児島大学では、一部の施設の貸出(有料)を行っています。利用希望の方はTEL 099-285-7111(代表)へご連絡ください。詳細は<http://www.kagoshima-u.ac.jp/about/shisetsu.html>をご参照ください。
【貸出可能施設】稲盛会館、各学部等の講義室等



(表紙)

●天璋院像(中村晋也作)
鹿児島県歴史資料センター黎明館(鶴丸城跡)前庭に平成22年12月「天璋院像」が設置された。天璋院は今泉島津家の出身。島津斉彬の養女となり、後に13代将軍徳川家定の御台所となる。家定亡き後は徳川家の存続を願い、江戸城を無血開城へ導くという功績を残した。

広報センター長 副学長
萩野 誠

また広報センターとしては、「鹿児島ジャーナル」とともに情報発信の二つ柱であるホームページをリニューアルしました。本年一月十一日午前十一時に新しいサイトを立ち上げました。とくに、入試情報の整理をおこない、受験生に親切なページとなっております。現在のところ、好評な意見ばかりで逆に心配ですが、どうぞご意見もお寄せください。

編集後記

「進取の気風」この言葉は、本学を表す言葉として、教育では「進取の精神」等に変化されながら使われています。この「進取の気風」が商標登録されていることは意外と学内外でも知られておりません。昨年九月に正式に鹿児島大学の商標となりました。これを踏まえた教育改革を本号では特集をいたしました。本学の教育現場における生の声が伝わればと考えております。